句集「雛の前」

浅田　洋

２０１９．１

アール・ブリュットの色・線溢るる初暦
はらわたに虚栗ある初明り
ほことたてのおとしどころや寝正月
抽斗に古日時計の独楽がじゃま
（賢治の童話に『水仙月の四日』）
母の忌のことなら水仙月二十日
息を止めてとＣＴの言ふ七日かな
褞袍に火ぃついてと仕方咄かな
いなくなるそれだけのこと日脚伸ぶ
吹き抜けの老いもてあます冬の椅子
風花の無重力より落ちてくる
（初詣、古市で乗り換えて奈良へ）
乗初や二上山（ふたかみ）の女男（めを）入れかわる
幼子は足音高し寒の雨
人日のみくじが回りさうな風
よそゆきのなりさせられて寝正月
（阪神淡路大震災から二十四年）
祈る身ほとり五時四十六分の霜柱
風花やことばは死者をぬらさざる
いなくなるそれだけのこと冬の蝶
春隣なき人どこもゆかざりき
（中国はすでに、やがてわが国も）

顔認証のカメラ地獄や寒の入

（得生寺）

左右（さう）の柱に脇侍は名のみの寒さかな

性根ぬく経はやまわす寒さかな

（賢治劇の思い出）

コートと帽子そでで引き継ぐ賢治役

（ブラジルに逝きし人）

冬銀河カムパネルラは帰らざる

２０１９．２

須弥壇に触れぬがゆかし日脚伸ぶ

雪明りいまに忘れぬ妻をさな

われは狐火つま雪明りの季重なり

（賢治の妹のトシ）

トシニフキンステイダイビヤウキンハヤリカゼ

煮こごりを喰ひそびれたる波郷かな

旗凍つる日や兵たりし父の靴

寒夜ひとりパソコンのごみ吸引ス

（広隆寺の弥勒菩薩像）

春立つやなにつかむとなき仏の手

傘巻くは尾を巻くに似て時雨過ぐ

叉銃してどこに父ゐる寒牡丹

如月の雲速くして月速し

枝垂るるは花のみならず春時雨

（風土記の丘の古墳群）

残雪や塚盗人の靴の跡

バレンタインデー村のをなごも鬱を病む
いぬふぐりほどなと漱石詠まざりき
蔑（なみ）するなかれ不忘の碑の句春の風邪
書皮にもならぬバレンタインの包装紙
しだれうめをさなはにほひひきよせて
サウイフモノニ　ワタシハナレナイ　古希の春
春泥に刺せ縄紋の尖り土器
良寛もふくろふ聞くか雪明り

（道明寺）

十一面は厨子に朧の観世音

（叡福寺聖徳太子廟）

太子廟に香煙ひくき雨水かな

（法隆寺）

春は夢殿さしでたまはる笑まひかな
ウインドヤッケに音立ち初むる春時雨
如月やどん底いつもずれてゐる
カムパネルラの父にはなれず冴え返る
遺灰まだよう納めずにけふ雨水
葦つらぬきて薄氷の動かざる
水温む底に花粉は層をなし
象徴のあるべきかたち牡丹雪

（辺野古の賛否を問う住民投票）

オキナワに蜂巣となりし山笑ふ

２０１９．３

ひとりゐのおすわりゆれて雛のまへ

あとひとつ句ができぬ日の初音かな
秘すべきものの小さくゆかしきいぬふぐり
啓蟄やわがむらぎもに虚（うろ）ふたつ
ひとりゐのおすわりゆるる雛の前
をらぬこと子どもに重し鴨かへる
盲学校に春の羽音や花ミモザ
嘘ひとつして土筆の卵とじ
春興の飛翔写真に息合はず
春泥や父のをしへし匍匐（ほふく）の字
二分の一の貸しバイオリン春休み
車椅子のフレンチブルも花菜雨
花のはざかひ近つ飛鳥の霞けり
（８年目の３．１１に、三句）
逃げ水追うて１Ｆのシャトルバス
（日本人は）
半減期を逃げ水追うて老いゆくか
（NHKの番組を観て）
風の電話に老人がゐて風光る
遺されし岐阜蝶のこと長電話
水琴窟の音聞き飽きて蕗の薹
野遊びの嬰児（ややこ）立つだけ座るだけ
卒業歌おのづと口に教師辞す
ラップなら思ひも吐けて卒業子
（車椅子のフレンチブルドッグ）
たんぽぽ踏みてブル後足の車椅子

蛍の目穴に残して蛇出づる
リハビリとや軍手にボール梅の道
他所者ならまだ赦される鳥雲に
マジックハンドで掴みしデブリ冴返る
無声映画はよく跳びあがる春一番
人体模型の臓器は旧字黄沙降る
歯のレントゲン春の飛行機ほど被曝
納税の列プラネタリウムの客過る
背なと座を間違ふ座椅子春炬燵
有相に無相寄り添ひて指す初桜
夫婦して雑煮が好きで初桜

（統一地方選挙）

おのづとひらく投票用紙万愚節
折りて継ぐ土筆の遊びをさなゆび

（1986年4月26日の三日後）

チェルノブイリの日や飛火野に松花粉

２０１９．４

たましひの位置どり俯瞰するさくら
玻璃うちの人影さくら映りをり
人疲れ死者も混じりし花疲れ
老いの死にいつしか淡し花菜道
こころ癒えし嫗が椿掃き寄する
糸電話のいともつるるや落椿
なつみかん嬰（やや）ためらはずおもさ捨つ
亀鳴くや無言電話の向こう側

カミングアウトたまさかに聞く弥生かな

二上山（ふたかみ）に瀬戸見ゆる日や風ひかる

地下千尺の永代供養万愚節

逃げ水を追ひ原発のシャトルバス

花疲れさかしまに着く最寄駅

（道明寺の試みの観音）

試し彫の菅公観世音ぼうたん

地にそひて風ねじるるや花吹雪

（大伯皇女の挽歌に詠まれた二上山）

山桜透けて弟（いろせ）と呼びし山

（ブラックホールの撮影など何になる、と言う人に）

ブラックホールは滅びのすがた暈（うん）おぼろ

柵越しの半身（はんみ）切なき薊かな

国境あればたんぽぽ家族別たるる

囀りやイマジンの訳いく種類

白木蓮Ｏｅの賞でしニルスの旅

ででむしや明恵もござれ木の股に

春暁のラヂオにイエス在せしこと

読みきれぬ残念本や目借時

折つて剥く蚕豆がんを二つ経て

（「下ノ畑ニ居リマス　賢治」）

うららかや下根子桜の下ノ畑

（近つ飛鳥博物館では、遠足の小学生が修羅を曳くことも）

惜春や声変わりしも修羅を曳く

しゃぼんだまハグせんとしておぼつかな

優生保護の時代生ききて弥生尽
鳥雲にノート遺りて子の雑字

２０１９．５

（子どもが小さい頃、庭木を利用して手作りぶらんこ）
子ら喜々とわがふらここのひねり癖

（孫三人が来て、二句）
三人子ひとりはふらここのあはひ
まず姉が冠りて飾り兜かな

（憲法記念日二句）
憲法記念日官報號外紙魚喰ふて
清志郎の君が代憲法記念の日　つきすぎか？
ふらここを立ちこぎて見る昭和かな
孫の名を忘れし友や揚雲雀
木の床に革靴響く聖五月
老病棟に母は眠りて葉桜に
栃ノ心に医療用蛭田植時
仏前にたけのこ行儀悪きこと

（大阪芸大の薔薇園）
芸大の薔薇はアリアを聴いてゐる

（叡福寺の塔）
街道は塔にますぐや鯉のぼり
改元やスーパーで買ふ祭鱧
水切りのアンダースロー夏来る
はつ夏のひかりを仕舞ふ金屏風
手のひらで切る危ふさも冷奴

（原民喜詩碑）

ぼうたんを崩るる花と思ひけり

女性客の頭越しなる氷水

筍茹でて犀の角犀の皺

更衣風をまとふは足裏まで

点滴の母の青あざ花菖蒲

緑蔭を斬りて絵筆の水払ふ

夕薄暑尾のなき蜥蜴前をゆく

火鋏にはさみ毛虫に緑の火

二行書きのHAIKU転々さくらんぼ

明易や亡き子のえにし夢に接ぎ

２０１９．６

（入院十句）

水無月のいくたびを手にバーコード

（手術室）

異装の国へわたげのごとき夏帽子

手術室は花のなき国滴れり

大和撫子も足蹴に開く手術室

大和撫子も足蹴に開くる手術室

立ち尽くす真昼の走馬灯の中

（水道トラブル）

生きてゐる蛇口は滴りの途中

（病室風景）

妻のトマト夕食になほ冷えてをり

病室のカーテンの襞走り梅雨

帰り来て蚊柱のこと苗のこと
仏壇に香きく思ひ梅雨に入る

（入院の朝、額紫陽花が咲きはじめていました）

がくあじさい左手で音探りをり
カーテンの襞読む無聊走り梅雨

（私の手術について医者と話していて）

笑いのツボにはまりし妻やさみだるる

（病室で天安門の日のニュースを聴いて）

鍬形の幼虫じゃなかった天安門の日
口で吹く母の霧吹き虹新た

（風外木高「涅槃図」が2019.4.9の朝日新聞に）

涅槃図をファイルに挟む孔雀ゐて
薄塩も塩のうまさの鮎の皮
たまさかに尻こちらむけ枇杷ふたつ
初蛍当つる子なりき真先（まさき）ゆく
白芍薬捨てらるるまで身を立つる
百合の蕊ティッシュにくるみ透かし見ゆ

（2019.6.9香港で大規模デモ）

一国二制度と云ふ危ふさに額紫陽花

（雨傘運動）

踏みしだかれてデモの雨傘七変化
さくらんぼマーク丸に柄七句選
あはれみもまた父子の情すもも酸し

（さる人の思い出）

かひなきを枇杷うまかりきとのみ偲ぶ

ＬＧＢＴ側側迫る栗の花
（沖縄全戦没者追悼式）
噴水や摩文仁の丘に火炉支ふ
（詩の朗読）
噴水に火を入るる日や命どぅ宝（ぬちどぅたから）
（玉手山遊園）
遊具なき遊園跡に合歓の花
試歩に暮れ夕焼け河をのぼりくる
水無月の燕はたれもふりむかず
（二上山からささゆりが咲いているとのメール）
ささゆりのメール弟背（いろせ）と呼びし山
水落つる音を尽くして滝の涼

２０１９．７

初蝉や老鶯も声ひそめける
（水遊び）
水風船誰にぶつける夏少女
真夜の蜘蛛ふた跳ねにわれ過りけり
村人の触るる早苗饗（さなぶり）妣の留守
（昨年のかなんフェス、二句）
青葉木菟すねてフリマの紅テント
青葉木菟ブリキの太鼓買うてやろ
通信簿に訂正の印てんとむし
百合の蕊くるみしティッシュ朱が透けて
水落つる音を尽くして滝の涼
水無月の雲見誰もをＹｏｕと呼び

足垂れて怒涛にますぐ青岬
麻酔覚めて白靴妻が抱へをり
ガリ版の句誌に父の句凌霄花
麻酔覚め昨日（きそ）の翡翠まぼろしに
術後養ふ弱冷房の吹き抜けに
老いてなほ世間に馴れず三尺寝
餌やる日課アウシュビッツの蟻地獄
腹話術の人形座して膝暑し
ラムネ飲んで邪鬼のおくびのごときもの
憤怒仏のファイル机上に夏休み
二上山（ふたかみ）を隠さふべしや夏鶯
二上山からメール笹百合天近く
地下街に濡れ傘を巻く桜桃忌
異国の師籐椅子並べ迎へけり
風煽るも噴水の虹動かずに
祇園会や古書の揃ひの持ち重り

２０１９．８

遠花火果てて街の灯うひうひし
ゆくりなく老鶯に口ほぐれけり
万緑の中あふむきの車椅子
読みつぎて史記列伝や合歓の花
たまさかは農も破産ス瓜の花
雲の峰ナビは田んぼの真中ゆく
水切りのアンダースロー晩夏光
早坂暁に貰ひし燐火原爆忌

口伝てにしか伝はらぬもの原爆忌
消滅の街片陰を選（え）りてゆく
麦とろや句座の乱筆恕されよ
雲形定規知らぬ妻なり秋燕
赤子のあくびうつりやすくて遠花火
花氷老いの微熱の肌くだる
赤紙のメール来る世の落し文
ゲートルを巻いてみせたる敗戦日
演劇部の備品に玉音・蝉の声
蝉と玉音きっかけに劇動き出す
石庭に小さきくつあと原爆忌
新涼や養生を解く木彫り仏
梅の古枝（ふるえ）に空蝉雨滴ならびをり
エンタツ・アチャコのボケとツッコミ秋暑し
手に摘みて露の光のすでに失す
星の名をとなへとなへて虫の夜

（太腿に貫通銃創）

夏の父貫通銃創老いにけり

（母の写真）

わが未生夏痩せもせず銃後の母
地蔵盆ハグして結ぶ涎掛け

２０１９．９

虫の夜身ほとり身ぬち消ゆるまで
悼みつつ青毬踏めば白き栗
鰯雲に眩み石庭踏み崩す

大道具教室を出ず夜食出づ
ひとつ跳べれば向かう岸にも鰯雲
生存率の未だ渦中にて敬老日
空也上人口称（くしょう）念仏葛の花
空蝉や何でも入る句の器
つくづくと要なき身にも良夜かな
息を止めてと声の降りくるけふの月
立待月蚊は後ろ手を好むらし
鰯雲裏照る月の速さかな
目が慣れて遺影の前に真夜の桃
雲形定規知らぬ妻なり蓼の花
敗荷やポルトガル語の遺灰証明
掌に取り分くる遺灰金木犀の花
菊いとふ心も和み十三回忌
金木犀の花芽忌日に未だ青し
子規晩年は老年なりや花梨の実
ウィスパーボイスの皮膚科の庭に紫苑かな
（宮沢賢治の「下ノ畑」）
下根子桜の下ノ畑や彼岸花
ともに昏るるや千手観音曼珠沙華
半減期の渦中金木犀散れり
星座盤回せば木犀匂ひけり

２０１９．１０

アインシュタインほど舌出せずとろろ汁
一臓のなき掌にたまふ通草ひとつ

一臓のなくて通草の愛（は）しきやし
手のひらに切る新豆腐頬ばりぬ
金木犀いつまで半減期の途中
赤蜻蛉水面に映り色褪せる
寒露の夕手術へと臍清めらる
麻酔苦のつづく電子の虫の闇
大阪弁のシュッとしている花すすき
冷まじや古鏡錆ごと伏せ置かる
句を作るうしろめたさも赤のまま
そぞろ寒手術へと臍清めらる
句を詠みてうしろめたさも赤のまま

（夜、奈良から大阪に）

二上山（ふたかみ）の女男（めを）入れかはる良夜かな

（朝、大阪から二上山の麓を抜けて奈良に）

二上山の女男入れかはるも奈良は霧
透きとほる金木犀の香りの忌
かなかなや風怖がる児の笛上手
邯鄲や金の耳輪の出でし塚
木犀香る理科室の天井に星座
雲形定規知らぬ妻なり硯洗ふ
バベルの塔のごとき蜂の巣栗爆ずる
かそけくもものおもはする昼の月
女人結界の標きはだつ漆紅葉
無言電話のむかふ非通知の十三夜

（知恵の化身といわれるが）

愚のごとし長尾垂らして穴惑ひ

（主のいない部屋の片付け）

黄落の一夜のわれを忘れめや　yy

（芸大の駐輪場）

女学生群るる檸檬の木の裸

雲梯の上に立つ児に花梨の実

２０１９．１１

（聖林寺でチェロの演奏会、七句）

十一面観音訪（と）へば秋のチェロ

（大悲殿（観音堂）へ）

観音堂へ階（きざ）冷え冷えとチェロの楽

観音の反り指細し暮の秋

十一面の抜け面（めん）の隙冬隣

（チェロ演奏を立ち見）

奏者逆光お堂紅葉に開け放ち

（中休み）

遠紅葉を光背にチェロ立て置きて

聖林寺くだれば柿を採るおきな

表現はつねに不自由柘榴爆ず

（１１月１１日正午ごろ突然の霰、二句）

霰いま天上の笊篩ひやまず

（雨傘につい香港を思う）

雨傘に霰打つ音やさしけれ

妻の語る夢の独り居冬立ちぬ

替え歌の言葉貧しき返り花

（聖林寺の演奏会、中休み）

ひいやりと堂の畳にチェロ立てて

千の交叉も交るはなき冬木立

百足を殺しなほ弄（まさぐ）れば龍の玉

虫愛づる姫も老いたり虫も老ゆ

冬の雲亡き子の朋の消息など

流星や紙の切り傷掌に真直ぐ

やまかがし野に消え漆紅葉かな

団栗の生りやう「あっちむいて、ほい」

蓮如名号煤けて昏し夕時雨

（得生寺の丈六阿弥陀仏）

丈六に脇侍は名のみ日短か

戦中派の義兄（あに）は雑炊厭ひけり

二上山（ふたかみ）の女男（めを）人知れず時雨けり

（叡福寺）

しぐるるや香煙低き太子廟

遠火事や消防車の灯赤ともちがふ

霜月やチェロ立てて待つゴドー他

芸大生は紅茶飲まぬか檸檬たわわ

（ブラジル行）

われの一生（ひとよ）の一泊五日冬銀河

（片づけ）

表札なぞる息も嗚咽も白き指

２０１９．１２

狐火に往還ちがふ寒さかな

一回しして違ふ景色か梟は

（天保十二年十月十一日、渡辺崋山自刃）

永訣かくのごとくに候日短

冬の月石窯のピザ切り分くる

義士の日や無声映画の濡れぬ雨

繊細は老いのご馳走冬木立

不埒の句矯めつ眇めつ河豚雑炊

夜の火事消防車の灯紅ともちがふ

遡上する川面の茜冬夕焼

心電図のペン寛やかに山眠る

マラソンコース未だ決まらず開戦日

ふくろふに二度見をさるる紅テント

手術前に臍浄められけふ柚子湯

卒業生の牛舎の臭ひ暮の団交

堂暗く邪鬼の嘘のごとき声

点描に女陰仄仄と冬銀河

絵筆払ふしづく落葉に色散らす

近つ飛鳥の鐘百八つの二つ吾子

賢治劇わからぬもよしクリスマス

子の噛みし鉛筆の痕七五三

三代の厨のにほひ煮こごりに

耳塚にほどとほからず梟

神の賽ふられ綿虫消えにけり

（得生寺丈六阿弥陀仏）

喉仏ひかりたまふや石蕗の花

葉牡丹のかしぎて雨水あふれしめ

十二月八日文語はホ句のみに

折り直しきかぬ折り紙冬薔薇

左手のピアノ曲集冬至風呂

永観堂にほどとほからず梟

棒操りの人形束ね聖夜果つ

贈られし悲しみ告げずクリスマス

（大石悦子さんに「第九歌ふむかし音楽喫茶あり」の句）

歌はねば湯ざめのごとき第九かな

（松尾あつゆき）

重しの句たとへばあつゆき冬至風呂

２０２０．１

（近つ飛鳥風土記の丘の千鳥紅梅）

近つ飛鳥に年あらたまる梅二輪

（河内から大和に初詣）

二上山（ふたかみ）の女男（めを）入れかはる初詣

八ミリフィルムを繋ぐ手ぎわや去年今年

眉間に雫ス夢かうつつか冬銀河

叛旗とはいかなる旗か敗荷

無声万歳チャップリン風夢はじめ

徒（かち）強（こは）き祖師の石段初詣

風花や雪の知恵の輪ほぐれけり

こわいものみたさ御慶の翁面

元朝の礫のごときおめでたう

手水舎のひしゃくの柄にも氷柱かな
粗相した犬捧げきて御慶かな
去年今年縫い目ほどけしごとき雹
繊細を曝して怖じぬ冬木立
葉牡丹のかしぎて雨水あふれしめ
福引の鐘にけおされ袈裟の僧
山頂の雹みやげにと初電話
（一遍聖絵の叡福寺に初詣）
聖絵の聖おはさぬ初景色
賀状ひと筆正坐のできぬ異国の師
（近つ飛鳥博物館）
安藤建築一望にして小春かな
（芸大の散歩）
原寸大の木っ端トナカイ雪催
虎落笛村出て系図はぐるるか
（のさばるの「のさ」）
寒卵意地で回らぬごときのさ
声失せてモノクロの母女正月
（賢治しかり、岡潔しかり）
天才のひょいと跳ぶ癖春一番
風花のほぐるるやうに命終は
（福井県）
義父義母は雪の雫の葬（はふ）りかな
（詩人の岡野絵里子氏）
天地揃への句は目が嫌ふ霜柱

人体模型の夜を水仙匂ひけり
少年の独楽とプリズム小抽斗
若き遺影の顔翳るまで雪明り

２０２０．２

（近つ飛鳥博物館）

初雪のおろそかにけふ睦月尽
雪挟む鳥撮るかたへの鳥図鑑
天地揃えの句集さくさく霜柱
中華街に獅子の崩るる寒さかな

（京都からも遅い初雪の便り）

睦月尽京の初雪おろそかに

（節分に氏神さまへのお供え）

年豆のおひねり賽銭箱の上
貫入の器につまむ年の豆
検査日が二ヶ月延びて春立ちぬ
蕗味噌や人はすなはち悲の器
貫入の器の緑蕗の味噌
雪催ひアウシュビッツが降ってくる
立春や曲がれば失せる昼の月
青鮫と詠みし兜太や下萌ゆる
蕗の薹あまりににがし腎一つ

（道明寺の試みの観音）

試し彫りの観音ゆかし梅薫る
建国記念日霙となりし暗峠（くらがりとうげ）
花の端境埋めるに小さき犬ふぐり

春三日月雲形定規妻知らず
遺影に白花バレンタインの赤リボン
冬の星回して夜の観覧車
九十九折（つづれおり）に迷ふ昼月春立ちぬ
薄氷を踏めばウィスパーボイスかな
仏壇の運ばれてゆく雪催
二上山（ふたかみ）のボケとツッコミ山笑ふ
下萌や赤子のあくび伸びきらず
鎖樋新しくして雨水かな

（術後）

身のうちの仔細わからず冴返る
薄氷を貫く葦の舫ひかな
春の砲列狙ふ梢の瑠璃鶲

（庭の古梅）

おろそかに古梅の蕾大きかり
逃げ水や飛び恥さらさらつもりなし

（叡福寺から當麻寺への道標、二句）

太子道（たいしみち）右はたゑまに春の泥
右たゑまそれより読めぬ春の泥
微熱ある手に菜の花の萎るれば

（通学路に辛夷の木）

花咲けば真白の子らや辛夷の芽

（得生寺の丈六阿弥陀仏）

丈六の脇侍は名のみ春浅し

（近つ飛鳥博物館）

神獣鏡のジグソーパズル薄氷
恋猫や白石加代子の声音もて
春霰たちまち消えて狐雨
（新型コロナウィルスで突然の休校）
予行が本番卒業式が不意に来て
庭に伏せし母の水瓶蕗の薹
指差していまはの父は蝶追ふか

２０２０．３

雛の壇見つめ見られて嬰（やや）揺らぐ
（涅槃図に百足蛇等々、二句）
啓蟄や涅槃図入りは何々ぞ
蛇穴を出でて涅槃に馳せゆけり
（子どものころの水たまりの薄氷）
タイムスリップの滑り心地や薄氷
（MBSミント「学校に行こッ！」）
灘中高の図書室ゆかし春炬燵
（猪の柵）
有刺鉄線たんぽぽ一家分かちけり
（３．１１遺されたものは悔むのみ）
花白ければ白を悔みて花辛夷
（３．１１遺されたものは悔むのみ）
花白ければ白を悔みて花辛夷
（子どもの頃の遊び）
つなぎ目の当てっこ土筆菩薩かな
身の内に深宇宙（しんうちゅう）あり鬼薊

非常事態宣言にがし目刺焼く
折返す峠の初音風かはる
（聖林寺の十一面観音）
聖林寺観音甲高（こうだか）春埃
一生（ひとよ）遅れて村を出づるか黄砂せり
冬季鬱歳時記になし花菜道
（ベテルギウスが超新星爆発をすれば昼でも見えるらしい）
春うらら滅びかそけき昼の星
真剣の一振り遥か春の雷
（３月１１日午後２時４６分過ぎ、被災各地に虹）
３１１の虹おのづからその頃ほひ
不意の霰手のひらに跳ね紫木蓮
（白木蓮の並木）
ゆきゆきて白木蓮の華やがず
蛍烏賊目玉一つが舌の先
（入院したときのリストバンド）
バーコードと化して点滴おぼろの夜
（津久井やまゆり園事件）
白木蓮慈悲の死といふ無慈悲かな
屈託や今年の花は白まさる
掃き寄せて花屑揉めば鳩出づる
雲形定規で引くたんぽぽの設計図
生死（しやうじ）にも生き死にの率木瓜の花
（聖林寺十一面観音の点検）
蓮弁をはづし茎立つ観世音

（外出を控えるように要請のあった日曜日、東京に積雪）

桜隠しおのづからその頃ほひ

（西行塚）

山桜丈高ければ暇（ひま）を散り

分かる価値分からぬ価値や入学ス

水底の波影（なみかげ）ゆかず水温む

（枝雀の笑い理論）

緊張の緩和と言へりチューリップ

２０２０．４

花屑を掃く箒目も老いにけり

ぶらんこに木のひねりぐせ子ろの声

今年ばかりの鍬に花韮匂ひけり

チューリップに見とれ遺影がふと近し

（エイプリルフールですみますように）

対数で目盛る死者数エイプリルフール

地を割りて肘のごときが蕨の芽

（スーパームーンの夕べ、緊急事態宣言）

今宵ばかりは春満月も物遠に

花屑にてんとう虫もまぜて掃く

花吹雪地までさらなる深みまで

（聖林寺十一面観音）

十一面の三面欠きて残花かな

（カート・ヴォネガット）

decencyと答へし作家花蘇芳

すっぱい顔の顔まね嬉し夏蜜柑

（新型コロナウィルス）

社会的距離なぞと云ふ葱坊主
凧とほく風の人質子が呼ばふ
囀りや聞きなしと云ふ如是我聞
風花の青き空より飛花落花
恍惚の一つの形花吹雪

（医療崩壊前夜）

トリアージの識別の赤藪椿
涙袋を締めて菫は泣きません

（肥料設計の詩「それでは計算いたしませう」）

げんげ田の出来を賢治は尋ねけり
清志郎の歌ふ君が代山躑躅
ニッキの紙舐めし少年木瓜の花
命終を俯瞰する位置揚雲雀

（非常事態宣言下）

亀鳴くや平気に生きるはなほかたし

（早くも牡丹が）

犬のるす風の牡丹になつかるる
藤散るや中継ほつほつ声途切れ
千の雨傘ほどく都市あり木々芽吹く
忌日あまた季語に散りばめ花水木

（現役の頃、養護学校で）

アール・ブリュットと云ふ三色ペンの桜鯛
蝶と木もれ日相殺しつつ消えにけり
いっこく堂の声ずらす芸春の雷

すかんぴんになって燕が目にとまる

（従兄弟死ス）

だれかれに肖（あやか）る春の仏かな

グレタ・トゥンベリずり落ちさうな濃山吹

桜蘂降るや憑きもの落つるかに

（観相窓を開いた大仏殿）

観相窓に収まらぬ顔黄沙せり

（十四年前、サンパウロの墓苑にて）

異国の囀り遺骨待つあひだぢう

２０２０．５

一朝に鶯老いる立夏かな

はつ夏の天皇も袖まくりして

しゃぼん玉にハグしてキャッチするつもり

芍薬や水に寝かせば屈折ス

（１９８６年のゴールデンウィーク、奈良公園に遊ぶ）

チェルノブイリの日や飛火野の**松花粉**

マスクして句柄も荒るる薄暑かな

濡れ土に蟇（ひき）もぐりくる夕薄暑

仏家では快楽（けらく）と言へり葱坊主

芍薬の残像崩ゆるしやくやく

句座のぼうたん俳句十（と）まりにうつつ得て

きんいろの毛虫は神の弥縫とも

緑陰のおよその深さ顎マスク

蛇苺ほどなカメラの監視の目

卒業生がゐてぶあいそな菖蒲園

麦こがし一世を数珠（ずず）で通しけり
芸大の噴水誰か描き留めよ
夏薊棘の深さを君知るや
蝶の道みかんの花の花しるべ
万緑に眠れり海に泣きし子が
風立ちて雨音にほふ夏来る
翡翠やひかりごけでも読んでやろ
夏鶯いつもそこらで引き返す
（十七年前）
緑陰のほのかに父の北枕
十薬は母の花とぞ思ひける
ときめきのマイムマイムよさくらんぼ
尼僧も買ふや門前のいちご大福
尻尾切り蜥蜴断腸の思ひかな
サイレントなら悲劇も喜劇蟻地獄
（一昨年、伐った柿古木に）
柿の花見納めて酒振りかくる

２０２０．６

夜濯ぎのマスクに妻の手音込め
（教え子に風をこわがる子）
風こわい子に風をこわがる薔薇のこと
（「青山常運歩」）
運歩スとふ山を遠見のかたつむり
蚊遣香尽きてけふ引く草も限（き）り
バックナンバーなほさかのぼり五月闇

供ふるに向き迷ひけり走り枇杷
列島に祈る五分の揚花火
（繁昌亭はいつも最前列で）
うすものを脱ぐ風そへてかぶりつき
（子どもの頃の思い出）
夜燈（やと）さんの辻に氷菓の幟立て
（阿修羅像）
三面六臂四つ耳で聞く夏鶯
汗ばむや触診しつつむごきこと
蝋燭をよう吹き消さずてまりばな
（聖徳太子御廟のある叡福寺）
千四百年遠忌の幟かきつばた
（一遍上人聖絵の叡福寺）
墨染に色を重ねよ杜若
（『徒然草』）
腹ふくるるとまなびしころのソーダ水
（『青森挽歌』「銀河系の玲瓏レンズ／巨きな水素のりんごのなかを……」）
青りんご果芯を銀河つらぬけり
先風呂にカルキの匂ひ走り梅雨
（「二上山を弟背（いろせ）とわが見む」）
二上山（ふたかみ）に届かぬ虹を愛（かな）しめり
夏羽織脱ぐ風も添へかぶりつき
蛇も吾（あ）も滑るや崖の竹落葉
庵主さまも門前の苺大福
蛍這ひ半跏思惟の指に飛ぶ

緑陰のほのかに父の北枕

二上山（ふたかみ）のいづれ隠るや梅雨に入る

十薬や母にも古き肺の痕

夏羽織脱ぐ風も添へかぶりつき

蛇も吾（あ）も滑るや崖の竹落葉

庵主さまも門前の苺大福

蛍這ひ半跏思惟の指に飛ぶ

緑陰のほのかに父の北枕

二上山（ふたかみ）のいづれ隠るや梅雨に入る

十薬や母にも古き肺の痕

蛍這はせ半跏思惟の指となる

半跏思惟の指から蛍飛びにけり

幼ければこぶしのほたる透けにけり

（養護学校で、握ることのむずかしさを）

ほうたるやいのちにぎるもいのちかな

（夜店の氷に並べて）

マニ車のごとじゃらじゃらとラムネ売

男梅雨前立腺のあるなしで

（米国のBlackLivesMatter運動）

コロンブス像地に口づけて芒種かな

翁面に黴にほひけりいのち憂し

２０２０．７

感染のピークアウトの見えぬ夏至

（『星の王子さま』の翻訳数種）

訳ことなれど作者手描きの夏帽子

子飼ひゆゑ修羅場を知らぬ兜虫

（村はづれの地蔵尊）

三歩小高き腰折れ（こしょれ）地蔵の植田かな

（養護学校で）

サングラス児に覗かるる教師かな

癌へて美味し冷奴掌に切り分くる

ほうたる来いと少年闇に恥じらへり

（大阪芸大構内の合歓の花）

シュレッダーあふれ美大の合歓の花

うなかぶすと向日葵詠みしわが厄年

貫通銃創父夏痩せて腿たるる

癌生存率掌に切り分くる冷奴

玉音テープ棄てて盛夏の空疎なる

病葉に問ふ秋冬のなき一生（ひとよ）

水族館のガラスに匂ふ青林檎

（6月1日午後8時）

列島に祈る五分の揚花火

（村外れの地蔵尊）

三歩小高き腰折れ（こしょおれ）地蔵喜雨しぶく

（弘川寺の凌霄花）

武士一木に歌人西行凌霄花

香煙の高さ定まり梅雨湿り

（昨年の入院中の句、二句）

病棟に夕日沈みしのちの映え

夕立晴れ点滴了へて潤へる

空蝉に風の歌口ありにけり
炎天のこの道ゆけばやまかがし
（道明寺十一面観音）
十一面のほとり濃くする五月闇
親になるための試練か夕焼けて
（コロナによる死者が千人に）
かなかなやナースコールは押せたのか
蕊取りし百合に目細め不登校
生中継の音声ずるる原爆忌
いっこく堂の声ずらす芸遠花火
（ブラジルにも）
天の川サンパウロには恩義あり
（二十二日夕、蜩を聞く）
夕されば波引くばかり遠ひぐらし
いなびかりやさし薄目で寝るややに
２０２０．８
父の風鈴母の土鈴と涼しけれ
ふたたびを妻に止まりし夜蝉かな
（永観堂）
見返り阿弥陀のお前自在の扇風機
サックス吹いてそのあと知れずソーダ水
ハイド亡くしてつい片蔭を歩くらし
端居なほ不作為の罪まぬかれず
飛行機雲片蔭不意に濃くなれり
（長崎出身のデザイナー毎熊那々恵さん、上京して）

黙祷のサイレン鳴らぬ都市の夏

（黒い雨訴訟判決）

蓑虫や黒い雨流れし壁とぞ

蓄音機の針を惜しみて夏の果

（散歩の前をゆく老人）

炎天に葛のつるさき踏みてゆく

まず生徒に演じてみせて夏の果

（十四年前の秋、お盆に二句）

天の川サンパウロには恩義あり

妻の封切る遺灰証明鳳仙花

夏草や七十五年目の原子野

気をつけは鎖せる姿勢秋立ちぬ

草いきれ父の教へし匍匐の字

炎天に半跏思惟の昏さかな

手渡さるる夕刊の風秋暑し

玉音のさはり一行劇転ズ

人体模型の臓器に旧字原爆忌

黙祷と黙祷の間（あひ）秋立ちぬ

さるすべりの下にゐて蟻降ってくる

さしで聴く河内音頭に踊りの手

清志郎の君が代跳ねて百日紅

きりぎりす軍服高く売れる世に

蚊柱の寄り来を避（よ）けてよろめける

無観客に吠えて満天鰯雲

蝶の影浮き立ち秋の蝶降り来

水抜きに蛇の尾何か言ひ残し
今年の寡婦に見えし翡翠われは見ず
お堂は涼し温もらぬもの坐すゆゑ

（昭和三十年代の記憶）

莫蓙に種干す被爆夫婦の秋暑かな

２０２０．９

管球ラヂオ廃れ玉音はるかなり
はじめての洋書の紙質赤とんぼ
熟れ頃と忌日案じて桃たまふ

（十四年前ブラジルで）

エレベーターの扉手で開け無月かな

（夢）

電柱の焼けぼっくいや月の岐路
蜘蛛の囲の一の糸切り秋の朝
Black Lives Matterに想ふ夜長かな

２０２０．１０

（東証のシステムダウン）

鳴物をうち鎮めたる良夜かな
風もてあそぶ付箋のページ秋桜
付箋剥がして花占ひの夜長かな
教師の付箋めずらしさうに秋桜
天才なほもて往生をとぐ良夜かな
待ち待ちて金木犀に初の花
金木犀に掃き残したる花の暈
もくせいや詩想も詩句もきはつせい

（一須賀古墳群の蝦夷塚）

去年の木の実に今年の木の実蝦夷塚

金木犀の花散るほとり古梅伐る

残生（ざんしょう）は手書きの迷路吾亦紅

つづら折りゆけば鳴き継ぐつづれさせ

青毬を踏み割り白き栗汚す

（手術前日入院）

木犀咲きてリストバンドの人となる

抜けるしかないトンネル昏し月迷路

金木犀かトンネルの風匂ひくる

譫妄（せんもう）のビラ一面の秋夕焼

（手術日）

大和撫子も足蹴に開くる手術室

きのこのぼうし落ちて擬似死と思ひけり

もどかしき麻酔より覚め秋の声

手術痕にフィルム一枚冬隣

（手術後、急に寒くなる）

麻薬吸う息の漏れきて冷まじき

アルコールで拭きし便座の夜寒かな

陰部拭くらし夜長ナースの声厳し

歎息が鼾となりし夜長かな

生老病死排便に尽く秋の霜

雨の木犀花こごえをり退院日

秋湿り妻が守宮の糞洗ふ

母の声を吾（あ）に死なしむか濃竜胆

（嫗一人）

屈みて拾い立ちては流す花芙蓉

裏返しの手袋丸め鶏頭花

孤に滅びるか密に滅ぶか曼珠沙華　密？

玉音に虚子は蓑虫泣かせけり

（得生寺）

千年の仏とをりし秋時雨

天の川の果に散骨したと云ふ

災疫や祈りかそけき露時雨

金木犀の花ほつほつと零れけり

蟷螂の死して腹蔵あらはるる

穴惑ひしっぽに何か言ひ遺し

集団自殺する蚯蚓だもの鳴きもする

胃カメラの飲み込み下手やとろろ汁

２０２０．１１

仏飯に性あらはるる十三夜

七十余年身もねじれたる後の月

（眼鏡を新しくして）

二つの月に二つの影や十三夜

術中にはまりて庭にいのこづち

（医者との会話）

秋の風に追ひつめられて吹き溜まり

（十四年前、ブラジルへ）

天の川を一泊五日の憂ひもて

（金芝河）

飯（めし）は天ですと詩人の詠みし今年米

ねこじゃらし穂は魂を抜くやうに

蓑虫も仮の宿りのダンボール

今生はいつ色褪する秋の風

残る虫消えて無名の闇となる

灯火親しペンのレ点に古色あり

（叡福寺）

街道は塔にますぐや秋の雲

（幼き頃）

仏塔のごとき藁塚子に高し

立冬や垂直に打つ疫注射

（叡福寺）

立冬や塔高からず太子廟

（文化祭の劇）

カンペ読むざしきぼっこや秋うらら

（宮沢賢治「どんぐりと山猫」）

どんぐりも Lives Matter と思ひけり

（老農夫）

妻のことをんなでとほし今年米

うわごとや記憶はじめの林檎汁

体重計壊れ浮き身の柚子湯かな

吹き抜けに灯のなきツリーそぞろ寒

（蓮如さんの「御文章」）

徳音（とくいん）のことば見つけて灯火親し

秋冷に曇ることなき古鏡かな

（拉致前日、めぐみさんからプレゼントされた櫛）

一本の櫛抽斗に神無月

（以前に、近つ飛鳥博物館で）

握手したよ十一月のロボットと

（得生寺）

金泥も黒にまぎるる小春仏

息を止めてと声やさしかり神無月

冬座敷死は死なるるを定めとし

天気とは天子の機嫌小春かな

（清水眞砂子さんのことば）

ポインセチア無名勝ちとるまでの紅

洗濯機の沈思黙考冬ぬくし

八面の観音ゆかし花八手

影のごとセロに寄り添ひ冬ざるる

冬ぬくき遠き記憶もありにけり

肘まくら日時計のごと日向ぼこ

（新型コロナウイルス感染症）

棒グラフで統ぶる皇帝ダリアかな

銀杏黄葉半身（はんみ）ばかりが散り失せて

林檎汁年へて鈍（なま）るおろし金

年年見るもひととせ悲し帰り花

自閉の君がけふは先頭冬うらら

２０２０．１２

祝日一日遷（うつ）りて軽き十二月

（檻罠にかかった猪）

猪突かな檻の子ながら血の威嚇
少年孤りゆゑに狐火忘らえず
（検温）
冬帽子擡（もた）げナースに額撃たる
明日からけふに艦隊来たる開戦日
銀河望めぬ地に住み古りて葛湯かな
死なるるは死に後るとも開戦忌
開眼（かいげん）の経早回す寒さかな
うつつも鬱もマスクで眼鏡曇らせて
暗室の灯がつきしまま冬銀河
ヨーコのイマジン　ジョンのイマジン風花す
冬の月神獣鏡を磨（と）ぎし映え
極月や片腕振って駆けゆけり
檻取り去られもはや罠なき枯野かな
（ソユーズによる帰還）
宇宙船出でて草生（くさふ）の湯冷めかな
冬苺ほどな縁（えにし）や彼の晩年
（劇『賢治先生がやってきた』）
冬銀河百年約し劇果つる
手持ち無沙汰なパトカーの窓雪催ひ
暮れきらぬ冬至夕べの星二つ
病抜けは祈りのことば一陽来復
柚子湯にはいい句が多したゆたへる
老いの死にいつしか淡し冬至風呂
（かつてはラジオ少年）

真空管こぞりて灯る聖夜かな

（大江健三郎『政治少年死す』（海賊版））

『政治少年死す』を聖夜の奇貨として

噛み当てて聖菓悲しき銀の粒

読書会に聖夜のちらし挟み持ち

雪催ひ北国の妻うべなはず

（父母の遺したものの整理、二句）

軍人手帳の和紙破（や）れにくし落葉焚

眼力（めぢから）の母はセピアに着膨れて

冬木立鉛直と垂直のあはひ

西暦で書き寸詰まる年の暮

手を振るに何に臆する師走街

（御座候は関西の今川焼）

御座候に並ぶ師走の社会的距離

（親鸞聖人「罪悪深重煩悩熾盛の衆生」）

深重（じんぢゆう）の響きありけり除夜の鐘

２０２１．１

ひとりゐのおすわりゆれて雛のまへ（年賀状）

大年のどこも裏白売り切るる

漫才の元はしやべくり去年今年

元日の立ち居おのづと父に似る

（叡福寺の太子廟）

香煙をあふぐなするも初詣

ただの火が浄火となるや三が日

（コロナで入場制限）
パイプオルガン空席寒き市松模様
鼻歌の裏声となる初湯かな
初夢や子の靴の砂ぶっちやける
人日や賽の目をもつてんとむし
薺粥亡き子の妻の恙なく
（昔、師走に伊勢の獅子舞）
獅子舞に頭噛まれし框（かまち）の子
（今年ばかりは）
アスレチックの柱列高く春を待つ
きぶくれて坊主めくりのどんでん返し
縁取られなほも霜葉の紅く甘く
（店主が「わかりまへん」と）
ふくろうのさもつがひにてふぶんみよう
子みみづくブリキの太鼓買うてやろ
（岩手県上閉伊郡の風の電話）
風の電話のことなら通ず銀河鉄道
風の電話のとこなら通ず銀河鉄道
１１７に折れし橋脚人小さき
かすかにしやりりこころの鍵をはづし雪
体重測定雪を見ていて軽くなる
千年樟に千一年の雪降れり
（宮沢賢治）
懸想文売りのことならおもしろい
木末（こずゑ）葉末（はずゑ）に風の裏声山眠る

（母の人形、三句）

供養人形箱にくるみて雪催ひ

悴む妻の美（は）しとくるみし母の人形

マリア像は供養しかぬと女正月

弄（いら）ふほどひしやぐ手びねり鮟鱇かな

大寒や小走りに来る発起人

朝の香（かう）夕べに澄みて冬座敷

縁取らるるは負けか霜葉のなほ紅く

（猪撃ちの猟師が語る）

猪のダニ落つる水瓶寒の月

（得生寺）

左右（さう）の柱に脇侍は名のみ冴ゆるかな

雪婆かたみに避けて同じ向き

（「永訣の朝」）

「アメユジュ」は天のうるほひ霙降る

鱗粉指に凍蝶の身はほろほろと

声ひびく書は身にしむや夜の霜

凩や少年老いて森の窪

YouTubeの鯨の声も春隣

自粛とや足地につかぬ掘炬燵

２０２１．２

節分と云ふはかなごと鰯喰ふ

思ひ出でて家去りがたし鬼やらひ

鬼やらひ豆と折紙手裏剣と

雪あかり半減期とふ浄めごと

雪あかり半減期とふ地の浄め
侘助を妻に教へて父の試歩
キウイ棚に群れてわわしき寒雀
セシウムのいつ半減期亀鳴けり
濃淡たがへけぶる二上山（ふたかみ）寒明くる
一輪車に振り子乗りの子春立ちぬ

（得生寺）

左右（さう）の柱に脇侍は名のみ冴返る

（人形供養の後、ケースを分解）

人形ケースの玻璃端欠くる余寒かな
氾濫や姫榊（ひさかき）にほひそむ二月
白梅や蕾さみどり枝みどり
チョコ呉るる最後の砦バレンタインの母
さみどりのみどり薄めて梅真白
二上山（ふたかみ）のけぶり濃淡山笑ふ
今朝降りし霰盛る葉は椎でなく
耳まで染めて老いなほ愛（は）しきバレンタイン
薄氷の水面は鈍しきらめかず

（グレタ・トゥーンベリ）

もとより青くとんがるも愛（は）し蕗の薹

（母を思ひ出でて）

母逝くやフロントガラスに霜の花
春暁や謀反の知らせ来るころか

（近つ飛鳥博物館）

閲覧室の銅鐸一打うららかや

春の雪水面に消えて波立たず

（安藤忠雄氏設計の近つ飛鳥博物館）

羨道に擬する風道（かざみち）枝垂れ梅

（初蝶）

後ろよりわれ抜け来しか不意の蝶

布袋軸去年（こぞ）掛けしまま雨水かな

白梅も見上げる花や昼の月

人われら周回遅れの雨水かな

ふらここに風うつくしきをみなごや

２０２１．３

ひとりゐのおすわりゆれて雛のまへ

ふらここや掌に錆にほふまで降りず

しゃぼんだまにハグしてゆくもおぼつかな

恐竜の足跡化石春の泥

たんぽぽの半欠けの絮半欠けの夢

ガードレールに斜め腕立て菜花の香

（二割がたはそういう手合）

啓蟄やとりあへず顔出しておく

花ミモザ邪険に払ひ車椅子

木蓮荅む己がじし指立つるごと

鍬立て置きて人はいづこに鳥雲に

（３．１１から十年、三句）

かなしみや十年（とせ）の末（うれ）の葉芽花芽

セシウムの吹雪く三月うつつかな

メルトダウンの日もけぶりたち杉花粉
火の鏃で上五はあれや牡丹の芽
紙ふうせんと紙の蛇笛一つづつ
風音をもぐらも聞けや風車

（３．１１三句）

春の黙祷抱かれて背なをつかむ手よ
セシウムはこんなにほひか春の雪

（福島の避難者のつぶやき）

みな泣き止めば泣き止むしかない鳥雲に
落椿暗渠の口でためらはず
追ひ詰められて抑論など木瓜の花

（幼稚園児の遠足の列）

「お弁当もってきた？」と口々に訊く遠足子
牡丹の芽火矢のごとき句詠めとこそ
村を出づるも百年遅れ木瓜の花
蒲公英や呆（ほう）けに向かひ丈高し
桜吹雪くや半減期の今その渦中

（霧箱の実験）

たとふれば放射線跡ゆきやなぎ

（お彼岸に墓参して）

つちふるや父の名の朱も消ゆるのみ
葱坊主子の作文に捕虜の父
二上山（ふたかみ）を隠さふべしや山桜
躙（にじ）ると云ひし杣人の巖すみれ草
エンドレスに鴉鳴かせて万愚節

（歌ってほしいわけではないが）
仰げば尊し歌ひ歌はれずわが一生
井戸水がある日冷たし水温む
とは云ふものの蓮如名号朧なり
（近つ飛鳥博物館の廊下）
羨道になぞらふ廊下鶯鳴くも
（フェイスシールドをして）
歌会始三月のこゐくぐもりて
（以前に見た綸旨を思い出して）
天気如此（てんきかくのごとし）と側医葱坊主

２０２１．４

花筏砂州また砂州と縁取りて
蛇穴を出でて塒（とぐろ）を巻き返す
俎にさみどりにじむ土筆和
過去帳にわが拙き手つくしんぼ
春の蛇荷を解き暦巻き返す
花なれば老農も褒む痩せチュウリップ
（二上山）
あしひきの悲劇の山も笑ひけり
（本を大量に処分して）
一生（ひとよ）を捨ててなほあるごとし本おぼろ
朧夜の髭の煤けし翁面
抗がん剤を押して筍置きゆけり
灯明田は古き呼び名や紫雲英咲く
光るものを飲み白鷺の白まさる

指パッチンがマイブームの子豆の花
桜蘂降るを地団駄踏みてをり
折れ竹に野藤の花の重さかな

（猪の電気柵）

電気柵の並びの薊けふ刈られ
すかんぽや檻罠の扉（と）は赤錆びて
ユニセフの封書は妻に痩せ蕨
玻璃越しの弥陀の昏さや躑躅映ゆ
たちまちに笑ひ空疎に花牡丹

（養護学校教師として、二句）

この子残してと幾度聞きしか花の冷
クレーン現象知りて悲しき春の雲
過去帳にわが手はひとりつくしんぼ
見える化とや風のさざなみ花水木
春惜しむ家を毀つと云ふ対話

２０２１．５

塗りつぶしたき胸の一言虻の声
亡くなりしこと置き去りに春の夢
大の字の紫雲英の凹みいつ消えし

（母が遺した憲法の官報號外）

憲法號外風を入るるや手は母似
揚雲雀その位置取りが気にかかる
去年（こぞ）の蝉殻見つけてけふの立夏かな
句を詠むなどは余生の虚業夏来たる
春眠に吉報ふくむ子の凛々し

吟行や句のメモで切る毛虫の糸
気散じは母の口伝てこどもの日
風を切る石で水切る五月かな
サイレントデモ似合はぬ街や五月雨るる
芍薬や声で灯して声で消す
木の股にゐて絶妙のかたつむり
左手のピアノ牡丹も聞いてゐる
芍薬のほとり翁の面を置く
棕櫚の実の礫（つぶて）すがしき五月かな
（3年前の手術、前日に翡翠を見て）
昨日（きそ）の翡翠一閃手術台に寝る
春愁や家を毀つと云ふ対話
（先日、原爆死没者名簿の風通し）
曝涼とこそ熱線浴びし死者なれば
（1945年8月6日午前8時15分）
片蔭と云ふ生死の段差日はふたつ
蚊柱やわれの一生（ひとよ）に二度ばかり
歳時記の牛乳浸し梅雨に入る
卯の花腐し自粛疲れのことば憂し

２０２１．６

羅や父の句に兵たるはなき
（原民喜「崩れ墜つ　天地のまなか　一輪の花の幻」）
牡丹散る花の幻墜つるごと
（かたつむりが汚染されているらしい）
木の股にシュレーディンガーのかたつむり

草引きの時確かむる蚊遣香
けふの灰夕べに眺む蚊遣香
葉桜や句くだるごとく虫垂り来
（息子の本）
本の書き込み持ち重りして街薄暑
（古い写真）
乳母車いまだ夏痩せ知らぬ母
計算尺捨つる十五の雲の峰
手暗がり窓にみかんの花匂ふ
（散歩の知人）
後ろ歩きに老いのリハビリ栗の花
（ＪＲ瀬戸大橋線）
麦秋や近づく海を妻怖る
歌声喫茶に誘ひし友の忌ソーダ水
老農のワクチン不安端居して
光年の果のひとつ灯ほうたる
心経称へて初のさびしさ心太
たましひの重さ廿一グラムほうたる
翡翠や悲しみの寡婦には見えて
神職に家の来歴戻り梅雨
不登校少女毛虫をシカトして
王陵の谷風抜けて夕立抜け

２０２１．７

引越のために投稿せず

２０２１．８

（幼なじみも同病に）

もう読めぬ君のアカハタ晩夏光

初蛍予感ある子の落ち着かず

（黒い雨裁判に決着）

黒い雨が軍事機密でありし夏

黒い雨へばりつきたるごと熟柿

（少年Ａの記憶）

被爆者夫婦西瓜の種を莫蓙に干し

夜盗虫は愉快犯なり花苗無残

（引越）

遺影の笑みを持ち来たりしや戻り梅雨

家移りに忘れきしもの戻り梅雨

稲光狗尾草も戦ぎけり

一跨ぎできるか老いの溝の蓼

風呂窓の夕映え守宮ほの紅く

パンダの箱の隙間に目覚め蝉時雨

（引っ越し後も時々は近つ飛鳥風土記の丘を散歩）

死者になほ伸び代あるや夕かなかな

膨張宇宙かなかなの声みちみちて

落蝉やおほかたは翅整へて

（五日夕方、妻と散歩）

西の茜に東の茜明日原爆忌

東の茜落蝉の翅染めてをり

（八月六日）

一分の黙祷蝉の声に和す

茜ほのかに夕弦月や敗戦忌

（捨てられないものを焚き火で）

夏の火に焚べて手強き軍隊手牒

（土門拳さん『古寺巡礼』）

蝉しぐれ『古寺巡礼』を呆（ほう）けつつ

（赤ちゃんの寝際のぐずりを母は「寝どろ」と）

ゆくりなく寝どろ漏れ来る虫の闇

俳句読めば老いのリアルや虫の闇

だんじりの提灯消して星飾り

空蝉に恵みの雨の幹くだる

（西東三鬼「頭悪き日やげんげ田に牛暴れ」）

頭悪き日と云ふうつつ蝉しぐれ

泡立草プルトニウムの黄の花粉

あわだちそうに悼まるる人もゐて

電柱の根方鶏頭傾ぎをり

市聖（いちのひじり）の六音六仏葛の花

（１９３７年の母）

見知らぬ母や南瓜（なんきん）神輿真ん中に

貨物列車の幻聴二夜夜長かな

稲光雲をあふれて零れくる

早逝と聞けば身構ふ蚊遣香

（２００６年９月名古屋のブラジル領事館にて）

ほぼ縦書きに葡語（ポゴ）の署名も居待月

パスポート手に踏みてゆくいわし雲

乗り継ぎて一泊五日の夜長かな

２０２１．９

次々に立ちて奏づる虫の径
ぬすびとはぎの径や私道と堰かれても
飛んでとんぼう虫籠に紙の音
一葉（ひとは）の異形あざやかに桜紅葉は
（２０２１年８月アフガニスタン）
開戦より終戦難き野辺の野菊に
（２００６年）
地より日矢サンパウロ九月の機窓
銀河果つる国や小銭をポケットに
（引っ越して）
露の夜の骨壷に音確かむる
（寝覚めの法師蝉）
コーヒー付く付く美味しいよーと蝉うつつ
新しき聞きなしを得し白露かな
天球儀の曇りが取れず秋暑し
溝跨げるか見当揺らぐ落し水
吾が寝袋に流星あふぎ逝きしまま
夜燈（やとう）さんの電気貰ひて地蔵提燈
（富田林市に引越）
仮住まひの余生身軽に赤蜻蛉
（トイレットペーパー）
落し紙の左右（さう）になほ違和穴惑
（昭和１３年（１９３８）、卒寿の婦人に聞く）
鬼灯やヒトラーユーゲントに旗振りしこと

鰯雲かつて昼ドン鳴りし町
老いの身も６０％（パー）の秋の水
「メルトダウンしています」表示そのまま虫の闇
曼珠沙華咲き一遍の道となる
梨の重きを言ひて器の青に盛る
遺骨膝にカーナビ迷ふ月の帰路
（中秋の名月、夕方雲に覆われていた空）
ぬすびとはぎの道を堰かるる無月かな
（深夜雲薄くなり）
遠峯の金剛山（こごせ）か黒き良夜かな
（赤い果肉を花だと知って）
無花果の花をこぞりて食ぶる妻なり
段ボールに蓑虫姥目樫伐りて
おろしそば喰ひはぐれたる義兄（あに）も亡く

２０２１．１０

ぬすびとはぎつけて繕ふ鋏鈴
命終もかくは明るき落葉径
蚯蚓鳴くや自死するものぞ鳴きもする
（安藤忠雄氏設計の近つ飛鳥博物館）
うちっぱなしの壁沿ひに飛ぶ赤蜻蛉
（祖父、二句）
仁王立ちして杖できのこの松葉避（よ）け
放蕩に孫子（まごこ）染まらず零余子飯
いのこづち老いて減りゆく付箋の句
十五年目も金木犀の散華かな

（テーブルに置いて）

花梨の実越し来し部屋ににほひ立つまで

本を閉じれば秋灯の虫ルビと化す

十月の蝉鳴き出づるもひとつこと

鬼の子や段ボール箱貰ひきて

トスするに花梨一顆の固すぎる

秋彼岸異国の波は花束巻けり

時差呆けに冴ゆるものあり帰路の月

銀河鉄道文庫本より砂こぼれ

月に未練や手動の鈍きエレベーター

（「植えるに時があり、抜くに時がある」コヘレトの言葉）

子規の一世（ひとよ）の春夏秋冬牛蒡抜く

かの丘は裸木（らぼく）と聞きし桜紅葉

三日月の零るる角度残る虫

越し来し部屋に鳴くやいづれの残る虫

権利書に古本匂ふ秋の夜

（ブラジル往還）

時を戻して往きしを元に月の帰路

（近つ飛鳥風土記の丘）

蝦夷塚（えみしづか）何年ものの木の実かな

色なき風にはだらもみじの花水木

霜降（そうこう）や遺影の母のほつれ髪

（現役の頃、高等養護学校にて）

紅葉かつ散るビンボーを教へしことも

夕焼の眺めよき家茜月

（高校のフェンス越しの声）
マスク手にエール繊月震はせて
インタビューにあらぬ方見て神無月

２０２１．１１

黄落や人と云ふもの二度死すと
故人ゆゑゆかりのままに石蕗の花
（十一月に金木犀の花）
隠れ木犀香に咲き出でて花七日
（以前の家の大きな金木犀、二句）
金木犀に掃き残したる花の暈（くま）
日は天心に金木犀の影あかく
原戸籍（はらこせき）に岳父の明治秋の雲
（現役の頃、般若寺にほど近い牧場で）
実習ノートに牛糞のシミ秋桜
檻罠を隠せし窪地烏瓜
古き友の訃の一葉に今朝の冬
（瀬戸内寂聴さんが亡くなられました）
柊の咲くや百寿（ももじゅ）を待たずして
柿落葉渋百年の火力はや
（診察を待つ病院の窓から）
しぐれ過ぎてたまりの水を離れぬ子
ほとりして妻に柊匂ふらし
（オシメ替え）
嬰（やや）はひとごと花梨のごとき尻拭くも
（テーブルの置物）

コロナ凪きつね奏づるレストラン
ひーよと鳴けりひーは悲と思（も）ふ霜の月
冬茜ふるさとの川遡りくる
朝礼台に帽振る背丈皇帝ダリア
月の蝕桂落葉の匂ひけり
（引越）
毀ちし古家（ふるや）に炬燵のまどゐみんなゐる
（イオンのクリスマスツリー、二句）
老人が見下ろす聖樹見上ぐる子
聖樹のほとり車椅子連れ憩ひをり
（数年前、風土記の丘のフリマに梟と木菟、二句）
雌雄不明もふくろふつがふ紅テント
子みみづくブリキの太鼓買うてやろ
（水原秋桜子の句「蓮枯れて大いなる鯉どに入りぬ」）
秋桜子の「ど」を見つけたる神無月
（昔のケーキ、それでもおいしかった）
クリスマスケーキ似非仁丹の甘さかな
まろき聖菓や家族のまどゐまったきころの
読書会途次のちらしに聖夜劇
冬の絵葉書検閲印に父滲む
薬名のしゃれのめしたる寒さかな
をさなも老いも百合の木落葉踏みしだき

２０２１．１２

（戦時中の「子供の科學」、二句）
開戦日ヤフオクに「子供の科學」

「子供の科學」といふといへども開戦日
ビニル傘を垣根に挿して師走かな
隠れんぼの像に掌を置き息白し
（宝塚音楽学校生）
プラットホームの端に予科生十二月
（十二月三日、妻と出かけた帰りの虹、二句）
時雨虹たちまち消えて夕茜
けふのこのあといくたびの時雨虹
似非仁丹の銀の甘さもクリスマス
狐火の闇聖夜となりし少年期
時雨去りたまりの水をはなれぬ子
木瓜の紅白思ひのままと言ふさうな
クリスマスをタブーとしたる教師われ
タマゴッチ育てるようにクリスマス
リベンジ消費今年ばかりはポインセチア
（草田男の句「遥かに秋声父母として泣く父母の前」）
秋声遠し師への電話に夫人の嗚咽
七こ数へて父の柚子湯の仕舞風呂
賭場囲むごとき子どもら夕落葉
「はい」されて手鞠わが手にさあどうしやう
大縄をまづくぐり抜け子がころぶ
（元の家の跡地）
毀たれし更地の隅の龍の玉
（少年時代の自分に問いかけるつもりで）
君の抽斗に北斗を指す独楽はあるか

旗日消え極月過ぐる軽さかな
旗日遷（うつ）りて八日底荷に十二月
歌声喫茶の相伴強ふるクリスマス
野水仙に乗り捨てられし竹ばうき
（少年のころ、父と山に入り）
冬木立笹生に寝（い）ねて風遠し

２０２２．１

かくれんぼうの鬼と子の像去年今年
（２０２２「はたらく仲間のうた」カレンダー）
「ぼくの仕事」と言ふ自画像も初暦
（孫は翁面が怖いようで）
初笑ひややの気になる翁面
（スマホに電脳の化粧を施した顔）
福笑ひスマホに子らの形（なり）傾（かぶ）く
（何を期待されているの？）
「はい」されて手鞠わが手にどうしやう
（独楽二句、とは言え大好きでした）
抽斗の闇に傾く邪魔の独楽
独楽倒れ日時計となる抽斗の闇
（生垣の山茶花の花）
人日の花むしる背な耳遠し
南京櫨の実もこぼるるや初粉雪（こゆき）
霜の威にものの芽かたく鋭かり
（前澤友作氏の宇宙旅行）

垂直に寝ての初夢たのしからむ

（道明寺天満宮の猿回し）

竹馬の猿前のめり雪催

切り抜きを破り捨てつつ読初に

繊月や忌日も動く変更線

遊具の色を塗るも万才小正月

ボケ封じにと亡き名おひおひ息白し

七草や老いてはともにしもやけて

（オンライン授業）

けさ七草の粥食べた人挙手をクリック

でんしんばしらなくは八月まったひら

（龍雲寺）

仏足石の彫りの紋様龍の玉

いつかいびつにわがころほひのかりんすつ

侘助や死を強ひらるることなき世

人日の花もぎる背な耳遠し

数へ日の夜廻りの柝（き）は俄（にはか）の柝

（柝：拍子木、俄：地車の舞台で演じる寸劇）

寒柝（かんたく）や祭蔵より俄の柝

紙吹雪に古家祓ひけふの雪

（散歩途中、竹刀を振る青年に出くはして）

終末時計残（ざん）百秒の寒稽古

薄氷（うすらひ）きしむ音懐かしき通学路

大寒の鉈噛む真竹匂ひけり

手押し車に犬恬淡と春待てり

夜咄や俄（にはか）の口上口移し
（半世紀前）
掘炬燵にガリ版の絵の同人誌
（シミュレーション）
飛沫のみ電脳富岳の嘘かな
（引越、まず手始めに）
臘梅や去年（こぞ）は人形供養から

２０２２．２

春萌す二分の一のバイオリン
（『苦海浄土』に無塩（ぶえん）のことば）
酢橘添へ無塩（ぶえん）の鰯節分会
節分や恙ある身の無塩の鰯
（テトラパックの豆）
どう転がしても角の立つ豆鬼やらひ
テトラの豆に角立ち疫鬼遣らひけり
箸先噛みて越の竹箸ぼたん雪
川面縫ふひかりの蛇行寒の明け
終末時計残（ざん）百秒の立春大吉
笹生（ささふ）に寝（い）ねて松渡る風冬深し
ねんねこにひよめきちかし匂ひけり
昼の月この地に住まふ僥倖に
一遍も正座せぬまま一月尽
別室に寝（い）ねて春月寝（い）ねしまま
いつまで冬眠まむし注意の古看板
（驚きました。なんなのでしょう？）

ちぎりし葱のあとの葱より水の棒

（七日、プーチン、マクロン会談）

核大国とのみの矜恃か冴返る

何待つとあらねど老いの春待つは

いまだなじめぬ老いと云ふもの春を待つ

母の忌や蔦をほどきて実南天

（小学校の凧揚げ）

寒鴉軒並み低き凧ばかり

心理ゲームにしてしまう癖寒鴉

おさがりはバレンタインの妻のチョコ

（養護学校の教師でありしとき）

母チョコは最後の砦バレンタインデー

町場は耳の方向音痴猫の恋

うなさるるを夢ごと揺する霜夜かな

（老いの遅速、三句）

老いに遅速と云ふはある柚子湯かな

是非もなき老いの遅速や春仏

とんとんと揃へて束（そく）るひね蕨

十歳（ととせ）のデブリ糸引く芋の煮転がし

生存率の表あらたむる雨水かな

（反響して）

あらぬ方（かた）に恋猫の声街中は

冬の年輪殻まるごとがかたつむり

いつより残生全天冬茜

棄て句には句にならぬ父母干鰈

（数年前、中山寺の腹帯）

授かりし腹帯（はらおび）立てて桜餅

啄まるるや赤実の黐に春の雪

（ウクライナ）

戦争がはじまるよーと恋猫の声塀むかふ

春の素足のことなら大き仏足石

父晩年の隠れ煙草や湯冷めして

（ウクライナ侵攻の日は高校の卒業式）

卒業証書丸め砲声聞きしか君よ

鯛焼の湯冷めしてをり阪急電車

（確定申告を終えました）

傘巻くは尾を巻くに似て納税期

（賢治の妹のトシ）

トシニフキンステイダイビヤウキンハヤリカゼ

２０２２．３

（『罪と罰』）

地に口づけよとソーニャは言へり落椿

（いつの日か）

春泥に口づけロシア兵ウクライナ兵

（「下ノ畑ニ居リマス　賢治」）

耕しや下根子桜の下ノ畑（はた）

（リハビリのためと）

抗がん剤に友のむくむ手レモン握り

（養護学校に転勤して）

卒業式のしじまをやぶるとごるゑよき

（雛祭りに）

鶯餅こぼるも愛（は）しき青黄粉
雛納めひとのにほひの消ゆるまで
木の家にシェルターはなし雛納め
逃げ水の野をゆく戦車追ひつけず
ミモザ咲く盲聾校の境目に
啓蟄やからうじて出る試着の手
眩しみてぶあいそな嬰（やや）うららけし
折りて継ぐ土筆のふしぎまだをさな
どうつながるの？３１１のけふとあの日と

（３．１１に初蝶）

あの日に翔り３１１のけふの初蝶
半減期が時きざむ地や花ミモザ
ふたたびを３１１の電源喪失

（ソユーズの帰還）

湯冷め顔なる宇宙飛行士カザフの野
人体模型の二臓が足らぬエイプリルフール
啄むにも時節あるらしつひの黐の実
日の丸の染みほのかなり卒業予行
悲しは愛（かな）し３１１の花馬酔木
半減期が時きざむ地やゆきやなぎ
多角形に梢の癖み木蓮蕾む
てのひらは遠目のひかり白木蓮
彼我（ひが）の差は喪ひしもの紫木蓮

（以前の地に今年も蕗の薹が、三句）

約（つづ）まりは私俳句蕗の薹
家の跡地にうつつ匂へり蕗の薹
百年遅れで村を出づるや蕗の薹
今生に人を手ばなし土佐みずき
風花や仏足石に触れもせず
（賢治の心象スケッチ「薤露青」）
どこへ逝くとも知れぬはよけれ辛夷咲く
（ウクライナ、二句）
ようく見なさい轍乱るる春の泥
遠き戦争遠き死はなしふきのたう
（わが父は）
どん底も聖夜の父でありしかな
繊細を晒して怖じぬ冬木立

２０２２．４

（ウクライナ、三句）
春泥に日々忸怩たる思ひあり
灰燼の街にも色の花のひとひら
三月の色なき街のスマホかな
（「花の下にて春死なむ」）
たましひのわれをみおろす花万朶
（１９８６年のゴールデンウィーク、奈良公園に遊ぶ）
チェルノブイリの日や飛火野の松花粉
（中国の胡偉氏）
約まりは永久（とは）の国益万愚節
花冷えや士気のあがらぬ兵たりし父

ロシア侵攻恥辱に加へ三月尽
ビンタをくれし教師の癖球鳥雲に
花吹雪吾（あ）は風の虚（うろ）立ち尽くす
半減期の今思はする花吹雪
亀鳴くやかの半減期過ぎるころ
けふの忌で嘆きおさめや涼新た
（聖徳太子御廟のある叡福寺）
花蘇芳御廟の寺は媚売らず
（二年前の春の入院）
春暁のナースに翳すバーコード
（「気散じ」「寝どろ」）
「きさんじ」「ねどろ」は亡母（はは）のことばや声朧
きのふ冷たき紫雲英（げんげ）の凹みすでに消え
幼くてたんぽぽの絮吹ききれず
甘吠えの子犬の一日入学す
（祈るばかりに）
牡丹一輪天地のまなか咲きにけり
（ある歌人に聞きし中国の柳絮）
百年の遺恨降り積む柳絮かな
ニホンタンポポ真中を猪よけ鉄条網
救急車過ぎゆき月の花水木
花菜道嫗とゆきて忘られず
躑躅の花の蜜吸ひしもの前に出よ
呆けるまでを晒して見せてチューリップ
大縄跳びによう入れぬ子花ゆすら

入学母子が小啄木鳥（こげら）の縞を見上げをり

（菖蒲園に就職して）

卒業生がゐてぶあいそや花菖蒲

（聖徳太子御廟のある叡福寺）

御廟の寺に香煙くだる杜若

あやめ蕾むやふたたびは畳めぬかたち

（木の股に大きい蝸牛が）

芽山椒の絶妙にゐてかたつむり

韮の花燃え殻に土匂ひけり

雨よりも雫の音の若楓

２０２２．５

（幼い頃）

世が世なら甲種と言はれ蛇苺

蛭の傷母に隠して長ズボン

（理科室の人体模型）

乾拭きの五臓を嵌めて夏来る

「OK，Google」と呼びかけてみる葱坊主

メーデーの下り坂にて著莪の花

（高校生の自転車が追い越してゆく）

背なのギターを荷台に立てて聖五月

暦日のごと球根を干す立夏かな

初夏のペットボトルで水を遣る

天才は要らぬ詩形や茄子の花

翡翠や老女（おみな）は機微を見逃さず

（仏壇屋さん）

お性根抜きし薄暑の仏壇二人がかり
姫女苑母は宴（やつ）るるものとして
初夏の富士孫三人の背なの幅
さくらんぼうを治む長女の威厳もて

（ウクライナ、三句）

原子野の色なき五月蛇苺
戦況に七曜あらぬ四月馬鹿
花錆びて戦車も錆びる卯月かな
寡婦の指す翡翠の影吾は追へぬ
十薬を母の干しゐてあと知らず
花あしび村の女子（おなご）も鬱を病む
乱調も楽しき青葉時雨かな

（得生寺）

左右（さう）の柱に脇侍は名のみ五月闇

（ウクライナ、三句）

数メートル先の戦争柿の花
シェルター出るや深きみどりの十薬に花
シェルター出るや原子野まぶしどくだみの花
見舞ひもならず供へもできぬ蛇苺
手暗がり写経の堂に新樹光

（竹ノ内街道）

謀叛の噂ゆきかひし道栗の花
燈明田は畑の呼び名夕立雲
小満の頭上烏に侮られ
減塩や冷やし中華の酢に噎せて

砥石のにほひのこるてのひら冷奴
古切手貼り連ねたる夏の小包
母の手ごねのあかねこ餅や半夏生
摩尼車のごと瓶じゃらじゃらとラムネ売り
気安くは並べぬ村の端居かな
宵宮の提灯出でて留守居かな
（小嶋洋子氏の句「地下鉄に息つぎありぬ冬銀河」）
地下鉄に息つぎありて八月危ふし

２０２２．６

詩集一冊老いて新じやが持ち来る
腰痛の水無月の葱もらひけり
（ろう学校教師に）
三十三歳の手話たどたどし額の花
（友を偲んで）
梅雨寒の集ひ茶店（さてん）の椅子並べ替へ
人に遥かな雨来る予感濃紫陽花
（ウクライナの動画）
蝿取紙垂るる兵たるものの上
（高等養護学校で）
李売る生徒に和む空き教師
（父の句「**秋の蚊の妻の乳房につまづける**」）
蚊が居て放哉父の句乳房につまづけり
存へて賢治の倍や半夏生
春泥を浴びて砲兵たりし父
二つ夏帽一つは星の王子かな

（小学生の見た光景）

被爆夫婦の菜種干す莫蓙影ふたつ

粗相に生ききて泰山木の花闌くる

（近つ飛鳥博物館）

打ちつぱなしの壁の羨道夏鶯

ウクライナの夕焼け色の夕焼けかな

屈託を雨打つままに濃紫陽花

（近つ飛鳥の散歩道でお会いした老人）

笹百合や補聴器の耳さりげなく

涅槃図に衣（きぬ）あらためし蛇もゐて

（昔の八朔市）

アセチレン臭ふなどして夜店眩し

蜂群れてのうぜんかづらあざやけく

真昼間を睡蓮のはや閉ぢはじむ

屈託に色くすみゆく濃紫陽花

２０２２．７

（八月が近づくとやはり原爆のことが、二句）

路面電車の八月炎なびかせて

真実に田水沸きし日のどぢやう

かの高貴なる白服にフィルムの雨

空蝉の背なの歌口風にかそけく

引っ越しの夜に見てよりの守宮かな

（ホテルの内庭に）

シティホテルに婚礼の夜のほうたる

（香港）

冷し中華に噎せて催涙ガスに噎せ
蓮咲けりこの曲線は仏がつまむ
（私は添削に反対ですが）
目くじら立てて死者の句添削するじやなし
（一年前に引っ越してきて）
わかれゆくための暮らしや青時雨
必死を知るもわれ初蝉に劣りをり
飲み忘れ消し忘れして梅雨の明け
百均に句帳がなくて溽暑かな
（散歩で出会ひし人）
半夏生の花愛で山の兵（つはもの）は
宇宙船に連れてゆくならあめんぼう
（八月六日）
真実に田水沸く日や日がふたつ
滝壺に滝に踏まるる邪鬼沸沸と
朝凪夕凪人はいつでも死ぬるゆゑ
空蝉の何に駆られてこの高さ
空蝉の葉に爪たてて吹かれをり
夏痩せや一臓一腑なき身にも
掌に羨（とも）し熟れしトマトの離れやう
老いの憂さ落つるトマトを掌に受くる

２０２２・８

伯父の軍服思はぬ高値終戦忌
夢の字のはらひはみ出す団扇かな
（小学校に狂言が来た）

太郎冠者がこんな爺さん蝉時雨

（少年の日の記憶、二句）

膝のつぼ二度打ち損じ夏の医者

つかず離れず父の背を追う夜の秋

検閲印や父の絵葉書軍馬冷す

孔雀鳴く王陵の谷晩夏光

一秒のずれを感謝の夏夕べ

人を信じて死んでゆきたい木葉木菟

（演劇部）

玉音のＬＰ持参夏合宿

堪へ難キヲ堪へ玉音ＣＤ鳥威し

（深田敏夫さんの原子雲の写真）

頭上五分のスマホめきたる原子雲

（深田敏夫さんの原子雲の写真にウクライナが重なり）

けふスマホめく原子雲見上ぐるショット

鳴きおさめ悪しき蝉なり今朝の秋

手づかみで無花果喰ふも盂蘭盆会

夕立の境霞むや盆見舞

（ろう学校に勤めていた頃）

手話で聞く銃後あたらし終戦日

火の粉のごとくチェルノブイリの天の川

地はまはり月はやき夜の鰯雲

兵役八年その八月の写真の父よ

露の世に蓑虫宿るダンボール

ほのとありしが隣家の庭の花おくら

根っこに噛ませ忘れし斧やいなびかり
（八月二十三日）
地蔵盆飾り上手で名を残す
（昔の大ケ塚八朔市）
御坊さんの人形を見て葱の苗

２０２２．９

本の上に本伏せおきていなつるび
秋の水ジョバンニの指屈折ス
天の川ほとになずらへ句が解ける
十五光年向こうに逝くか赤とんぼ
けふの忌で嘆きおさめや涼新た
（やむなしとはわかりつつ）
兵卒に名もなき大和曼珠沙華
老農は女で通し障子洗ふ
月の友縦笛の家教へらる
ひと回りして虫の音の桟敷席
夕かなかな星遠ざかりゆくばかり
横書きの癖字を縦に九月のビザ
色鳥や遠国の葬鳴きやまず
反響の壁を鳴かせて秋の声
うなかぶす向日葵の視野キャタピラ痕
（宇宙エレベーターの記事を読んで）
エレベーターで宙（そら）翔けのぼる良夜かな
尺八を捨てて余生の芋名月
（今年は９．１０が中秋の名月）

９．１１のその前日の良夜かな

生存率や芋名月も減塩醤油

つづれさせ終活何に間に合はす

変更線に忌日も惑ふ眉の月

九月のひこばえ桜根つこの洞（うろ）深し

解けぬ句はそらで覚える麦とろろ

忘れ物思ひ出す秋「百分で名著」

（桂信子に次の句があり、「りんご掌にこの情念を如何せむ」）

情念はとぐろ巻くもの林檎剥く

渋と甘の妥協つたなき熟柿かな

（空也像）

葛の花小仏（こぼとけ）のごと立ち連ね

手で喰ふ無花果はったりでなければ何？

しなだれて蛇穴隠す崖の萩

錆色の戦車となりし虫の闇

耳で見て目で聞いてゐる虫の闇

虫の闇死にゆく人に耳のこる

（賜りしを命日にお供えして）

山葡萄に戻れぬシャインマスカット

（以前の家、庭に大きな金木犀の樹がありました）

ゐないことにゐたたまれぬ夜の金木犀

あつゆきの句を読むことも夜長かな